

動物たちの“同定”の経緯 ②

前回、「うを」は「鮠魚」、すなわちサンショウウオだと『和漢三才図会』、山田伊八郎文書、さらには動物学・生態学的知見から結論づけた。この結論は、「うを」は魚 (fish)、というこれまで知られているような一般的な考え方とは、明らかに異なる結果である。

その結果を前提に、なぜ「うを」に「骨つぱりの道具」が仕込まれたのかについて、以下で考察する。

『天理教教典』第三章に、月日親神は、「うを」に「男一の道具、及び、骨つぱりの道具」を仕込むため、「乾の方」から「しやち」を呼び寄せた、とある。ここで考えなければならないのは、「うを」に「骨つぱりの道具」を仕込むため、なぜ「しやち」を呼び寄せたのか、ということである。

本シリーズの中で、「しやち」は、哺乳類でクジラの仲間のシャチ (orca) ではなく、「しやちほこ」、すなわち「鯪」「鯪鯨」「魚虎」だと述べた。この結論も、『和漢三才図会』に準拠したものである。名古屋城や姫路城などお城の天守閣やお寺の本堂、あるいは裕福な商家の棟飾り瓦として取り付けられている「鯪」を指している。

「鯪」は、尻尾の先をまっすぐ天に向け、“逆立ち”しながら身体を支え、突っ張っているかのような形状をしている。また、いかめしく構えたような姿勢や、緊張して固まっている姿から、「鯪張る」という表現が、「しやち (ほ) こぼる」、「しやちよこぼる」、「しやちばる」などのほか、「しやちほこ立ち」のような表現へと変化した。重力に逆らいながらからだを支え、突っ張っている姿形そのものが「鯪」なのである。

実は、サンショウウオが人類へと進化するためには、「骨つぱりの道具」が不可欠なのである。

進化史的に見ると、サンショウウオなどの両生類は、魚類のように水中から酸素を取り込む鰓呼吸だけでなく、陸上の環境に適した皮膚呼吸や肺呼吸を含む三つの「酸素吸収システム」を獲得している。このシステムは、「水中の住まい」と「陸上の住まい」の両方の生活環境に適応した結果である。

これは、両生類が魚類よりもより進化していることを示す好例で、両生類は成長すると陸上へ生活場所を移すが、繁殖だけは魚類の「繁殖システム」を受け継いでいることから、水中でおこなわれる。それゆえ、卵から孵化した幼生 (オタマジャクシなど) は、魚類のように水中での生活を余儀なくされる。上陸するためには、幼生から幼体、すなわち陸上生活に適したからだへと変身 (変態) しなければならないのである。

では、変態するさいに、何が大きな壁となって立ち上がるのか。それは、浮力が働く水中から重力をまともに受ける陸上生活への身体的大転換を強いられることである。

サンショウウオの幼生は水中では浮力が働くため、両足の筋肉にそれほど大きな負荷をかけることはない。むしろ、泳ぐだけであれば、両足 (前・後肢) は必ずしも必要ではない。ところが、浮力が働かない陸上生活に適応しようとする、重力に逆らうような力で両足を突っ張ったり、鯪張ったりすることが必要になる。そうしなければ、立って歩いたりできないのである。まさに「骨つぱりの道具」が必要になるのである。

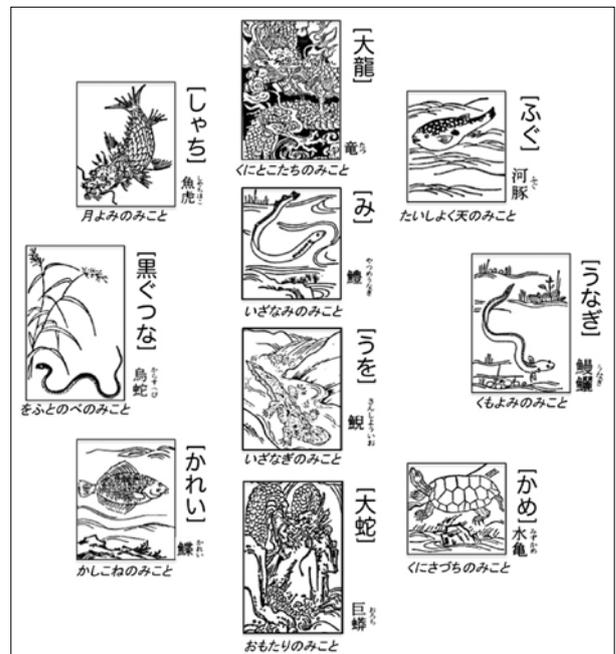
これは、「うを」に「骨つぱりの道具」が仕込まれなければ、今日のように、私たち人類は陸上で生活することができなかったことを意味している。

まさに、「うを」に「しやち」の「骨つぱりの道具」が仕込まれなければ、私たち人類は存在しなかったばかりでなく、「陽気ぐらし」世界を実現させることも不可能なのである。

このように、本シリーズでは「元初まりの話」に登場する10種の神と動物たちとの関係の中で、独自の解釈を基に、登場する動物たちを生物学的に同定してきた。

「まとめ」

「元初まりの話」の中には、「十柱の神」として10種の神が登場する (下図)。これらの神々は、必ずしも10の神が存在することを意味するものではないが、その教説は、全能な親神の守護と働きを、10種の原理的な相をもって示し、それぞれに神名を配して説明したものである。



10種の神と動物との相関図。ただし、10種の動物は、『和漢三才図会』(東洋文庫)より転写。

いずれにおいても、「十柱の神」とともに、それぞれ関連する水域性動物が「元初まりの話」に登場する。本シリーズでは、なぜそれぞれの動物が選ばれたのか等について述べてきた。

また、親神は、なぜ「どろ海」の中から「うを」と「み」(ヤツメウナギ)を引き寄せ、それぞれに「しやち」の「骨つぱりの道具」と「かめ」の「万皮つなぎ」の道具を仕込んだのか。また、なぜ「うなぎ」を「水気上げ下げ」の道具に、「かれい」を「風」の道具に、「ふぐ」を「切ること一切」の道具に、そして「くろぐつな」を「引き出し一切」の道具に定めたのか等についても、生物学的に検証した。

『教典』第三章に記されているように、この世の元の神・実の神は月日親神で、月様を「くにとこたちのみこと」、日様を「おもたりのみこと」と称え、その他は皆、雛型と道具だとしている。

以上のように、親神が雛型と道具に相応しい動物たちを私たちに示されたことを、本シリーズの中で立証した。